

## 論文要旨

所属ゼミ	河野宏和研究会	学籍番号	80530860	氏名	牧野 誉仁
(論文題名)					
あいさつが人間関係の構築に及ぼす影響					
(内容の要旨)					
<p>私は、個人の経験から昨今は人と人との間でコミュニケーションを図る上でそのスタートポイントとなる「あいさつ」がなされていないのではないかと感じた。</p> <p>私達は幼少の頃から、「あいさつは基本」「あいさつは必ずしなさい」「元気よくあいさつをしましょう」と教わってきたはずである。しかし、私達の日常生活において、特に家庭や職場などにおいてはあいさつがなされない傾向があるようである。</p> <p>本論文の出発点は、私自身があいさつをしてもそのあいさつを無視する人に対して、「このボンコツ野郎め！」と怒った所からスタートしている。そこから、果たしてあいさつを返さなかった人はそのような呼び方をしてもいいボンコツ人間なのか、あいさつがなされない傾向があるのであれば、それは教育の問題ではないのか、あいさつが本来持っている機能とは何か、あいさつを指導したり教えるということはどういうことなのか、ということについて考察を深めている。</p> <p>具体的には、あいさつが交わされる状況を8つの場面に分類して、さらにはあいさつをする側、される側の持つ感覚を「ウチ・ソト概念」として場面毎に分類し、私自身の実生活や大学事務室においてどのようなあいさつが交わされているのかを観察し、どの分類にあたるのかについて考察を行っている。また、あいさつと教育の関係について考察を深めるために、現在東京都の公立学校で最も採用実績の高い国語教科の1年生用から6年生用までをすべて精査するなどして、実際の教育現場ではどのようなあいさつ教育が行われているのかについて調査を行い、あいさつを教えることの難しさについて深く掘り下げている。そして同時に、学校の外において地域の人々が「あいさつ運動」を展開している事例を2例取りあげ、杉並区のあいさつ声掛け運動、目黒区のあいさつ声掛け運動に従事する方々にインタビューを行い、そこから見えた学校・地域・家庭におけるあいさつ教育、あいさつ指導について考察を深めた。</p> <p>結論としては、あいさつの持つ言語学的な機能や役割、歴史的な背景についてはある程度考察を深めることができたが、特に「あいさつを教えること」については前述のように学校や家庭など様々な場面での指導が様々な形で行われており、その1つ1つの場面を追うことができなかつたために個人的な見解に近い形の結論となっている。しかし、ビジネススクールに学ぶ者として、企業内であいさつの本質、あいさつの重要性とは何かを説く際の「提言」を最後にまとめており、あいさつをしない社員のマネジメント等に役立てることができればと考えている。</p>					